様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００２０

研究課題名（和文）ウィトゲンシュタイン哲学に基づく意味のデフレーショナリー理論の研究

研究課題名（英文）Study on the deflationary theory of meaning based on Wittgenstein's Philosophy

研究代表者
重田　謙（SHIGETA, Ken）

長岡技術科学大学・工学部・特任准教授

研究者番号：３０４５２４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：後期ウィトゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein, 1889-1951）の言語の意味に関する洞察に基づいて，「意味のデフレーショナリー理論　（DMLW）」という意味に関する独自の理論を提唱し，①解釈の観点から，DMLWが後期ウィトゲンシュタインの意味をめぐる議論と整合的であるかどうかを検証し，②解釈とは独立した観点から，DMLWが意味の理論として妥当であるかどうかを検証し，それによって③DMLWがこれまで提唱されてきている意味論とどのような関係に立つのか，その位置づけを解明してきた.

研究成果の概要（英文）：Based on the insight of the late period of Wittgenstein (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) about meaning of language, I have proposed an original theory of meaning, which I called 'deflationary theory of meaning (DMLW).' First, from an exegetical point of view, I have examined consistency of DMLW with the late period of Wittgenstein's argument about meaning. Second, from a theoretical viewpoint independent from exegetical one, I have investigated validity of DMLW as a semantic theory. Third, through those studies I have elucidated what relations DMLW has with a good many and various kinds of semantic theories that have been advocated so far to provide it with ground for the theoretical efficacy and originality.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：ウィトゲンシュタイン　意味論　デフレーショニズム　懐疑論　クリプキ

１．研究開始当初の背景

言語と意味に関して最も徹底的で最も説得的な議論を展開したのは，私にとっては後期ウィトゲンシュタインである．特に S. A クリプキの画期的なウィトゲンシュタイン解釈（*Wittgenstein on Rules and Private Language*, 1982）以降，意味に関する議論においてウィトゲンシュタインに言及しない論者はほとんど存在しない．それにもかかわらず，現代の言語哲学の文脈において彼の議論の核心が適切に受容されているとは言い難い．2010 年 4 月からウィトゲンシュタイン哲学を真摯に受容したうえで独自の議論を展開している哲学者（P. ホーウィッチ, P. ボゴシアン, C. ライトなど）が集うニューヨーク大学に客員研究員として参与し直接彼らと討議する貴重な機会を得た．そして，自分の考えるウィトゲンシュタインの議論の核心は彼らのだれにも共有されておらず，また自分の見解に致命的な欠陥が含まれてもいないという確信を得た．そこでウィトゲンシュタインの意味理論を「ウィトゲンシュタイン哲学に基づく意味のデフレーショナリー理論」と名づけて独自に定式化しその可能性を追求するという研究構想に至った．

２．研究の目的

意味のデフレーショナリー理論（以下 DM_{LW}）の基本的な枠組は次のテーゼによって表現できる（と見込んでいた．）

〈DM_{LW} の基底-0〉

1.［規則論の標準的帰結（RS）］意味が成立する．⇔ 任意の主体がなんらかの記号を使用し，その記号の意味を理解する．

（［事実‐A］（RSの論拠） 論理的に可能な選択肢の中から語のただひとつの使用を指定する，あるいは指定することを可能にする「意味という実体」は存在しない）．

2.［私的言語論の帰結（P1）］私たちに理解可能な意味は，自分以外の他人もまたそれを理解することが可能な意味それだけに限られる．

3.［意味に関する懐疑論についてのテーゼ］RS，P1，［事実‐A］から言語の意味は理解できない，あるいは，そもそも言語の意味は存在しない，という懐疑論は帰結しない．

DM_{LW}を「デフレーショナリー」と呼ぶのは，それが意味と意味の成立について実質的な説明をほとんど与えていないように思われるからである（私見ではこれまでどの論者によってもDML_Wが提唱されてこなかった理由もそこに存していると思われる）．

本研究の目的は，このような理論的枠組みをもつ DM_{LW} について，①DM_{LW} が，解釈の観点から，後期ウィトゲンシュタインの意味をめぐる議論と整合的であるかどうかを検証する，②DM_{LW} が，ウィトゲンシュタイン解釈とは独立した意味の理論としてそれ自体が妥当であるかどうかを検証する，③DM_{LW} がこれまで提唱されてきている意味論とどのような関係に立つのか，その位置づけを解明する，ことである．

（本研究の申請段階では, DM_{LW}によって意味をめぐる諸理論を分類，再編成することを目的として設定していた. DM_{LW}の意味論としての包括的な適用可能性を示すことによって、間接的にその妥当性を根拠づけようとしていたのである．しかし，その申請後，自分の未公刊の論文（ “The A Priori and A Posteriori in Context”）についてのP.ホーウィッチ（NYU）との議論を通じて、意味の理論としてDM_{LW}を直接正当化することが必要であることを認識し，上述したようにより基礎的な段階に研究目的を設定し直した）．

３．研究の方法

①DM_{LW} における［事実‐A］（RS の論拠）を明示的に支持する意味の理論は数少ないが，クリプキが解釈するウィトゲンシュタインは明らかにそれを共有している．それゆえ，［事実‐A］の点において，これまでクリプキに向けられてきた数多くの批判の中で特に有力なものを詳細に検討することによって，意味の理論としての DM_{LW} の妥当性を検証する．それと並行してウィトゲンシュタイン解釈の文脈を離れて［事実‐A］を批判するとみなされる有力な意味の理論も吟味する（研究の目的②）．

②DM_{LW} とクリプキが解釈するウィトゲンシュタインとの異同を明確にし，さらに後者を批判することで，意味の理論として DM_{LW} の独自性とその妥当性を検証する（研究の目的②）．

③［規則論の標準的帰結（RS）］が後期ウィトゲンシュタインと整合的かどうかを，特にクリプキの懐疑論的解決とウィトゲンシュタインの見解との関係を明確にすることで検証する（研究の目的①）．

④①②③を検討を通じて, 間接的にDM_{LW}と他の意味論との関係を解明する（研究の目的③）．

４．研究成果

（1）DM_{LW} の理論的枠組をより精確に規定できたこと：３年間の研究によって，DM_{LW} の理論的枠組について，〈DM_{LW} の基底-0〉を修正し，下記のようにより精確に規定するべきであることが明らかになった．

〈DM_{LW}の基底-1〉

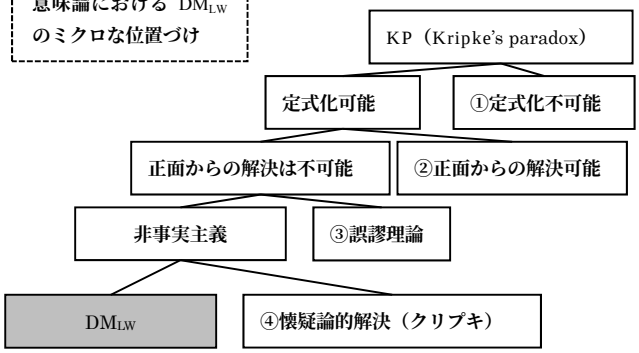
［テーゼ］ 論理的に可能な無数の選択肢の中から記号のただひとつの適用を根拠づけるその記号の「意味という実体」は存在しない．

［帰結1（意味の成立条件）］
私がなんらかの記号を使用しその記号の意味を理解する ⇔ 意味は成立する
［帰結1 の補足条件］意味の成立条件は記述不可能である．その条件に含まれる「私」は「任意の私」であってはならないが，その条件を満足する仕方で「私」を記述できないからである．
［帰結2（相対的な懐疑論的帰結）］現在に至るまでなされた任意の語の適用について，それが絶対に確実であることは証明できない．
［帰結3（全面的懐疑の否定）］そもそも意味は存在しない，あるいは意味という概念は無意味であるという全面的懐疑は帰結しない．
［帰結 4（私的言語批判）］私が理解するどの意味についても他人もまた理解可能である．

①〈DM_{LW} の基底-0〉は，三つのテーゼの並列によって表現されていたが，〈DM_{LW} の基底-1〉は一つのテーゼと，そこからの三つの帰結によって表現されている．なお〈DM_{LW} の基底-1〉におけるテーゼは，〈DM_{LW} の基底-0〉［事実‐A］の内容に対応している．
②［帰結1 の補足条件］は，特に“On Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox” (2012) の結論部分をめぐる他の研究者との討議を通じて得られた観点と，私自身の過去の論考「独在的な使用と経験的な使用－ウィトゲンシュタイン哲学によるウィトゲンシュタイン哲学批判の試み－」（2007）の着想を接続することによって得られた．その成果を，”Exposition of Two Forms of Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox”(forthcoming) において展開した．
③主に，発表「意味についての懐疑とその解決」（2011），未公刊草稿「意味についての懐疑」における，DM_{LW} の理論的妥当性の研究（研究目的①）と主に “On Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox”(2012)における DM_{LW} の後期ウィトゲンシュタインとの整合性の研究（研究目的②）を通じて，［帰結 2（相対的な懐疑論的帰結）］と［帰結 3（全面的懐疑の否定）］との区別を明示する必要性を認識した．

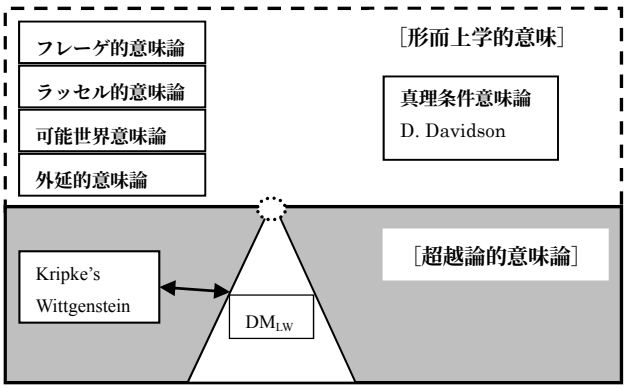
（2）意味の理論における DM_{LW} の位置づけを明確にできたこと：研究目的③の探究によって，他の意味論との関係における DM_{LW} の位置づけを次のように明確にすることができた．
①クリプキのウィトゲンシュタイン解釈をめぐる諸議論との関係という相対的にミクロな観点からは DM_{LW} を次のように位置づけることができる．

［図 1］
意味論における DM_{LW} のミクロな位置づけ



［図1］における①（定式化不可能）②（正面からの解決可能）の立場は〈DM_{LW}の基底-1〉の［テーゼ］を正面から否定する．クリプキの議論を直接論じている現代の海外，国内ほとんどすべての有力な研究者（G.P.Baker & P.M.S. Hacker, J. McDowell, S. Soames, W. Goldfarb, P. Boghossian, C. Wright, P. Horwich, P. Pettit, T. Thornton, M. Williams, 鬼界彰夫, 飯田隆, etc）はこの立場に分類できる．また③（誤謬理論）は〈DM_{LW}の基底-1〉の［テーゼ］は容認するが，［帰結3（全面的懐疑の否定）］を否定する（W. V. O. Quine）．クリプキが解釈するLW は④（懐疑論的解決）に分類できる．この立場（M. Kusch, 黒崎宏, etc）は〈DM_{LW}の基底-1〉の［帰結1（意味の成立条件）］を否定する．
②またウィトゲンシュタイン解釈を離れ，これまでに提唱されてきている意味論との関係というマクロな観点からはDM_{LW}はつぎのように図式化できるという展望を得ることができた．

［図 2］意味論における DM_{LW} のマクロな位置づけ



［形而上学的意味］の領域に属する意味の理論は「意味という実体」の存在を認める．ここに属する意味の理論は，〈DM_{LW}の基底-1〉のテーゼを否定する．これらの理論は，「意味という実体」に帰属する性質によって，非還元主義的・意味論的・志向的な意味の理論と還元主義的・自然主義的な意味の理論とに大別できる． 前者に属するものとし

ては，話者の意図に基づく理論（P. グライス），概念役割意味論（Conceptual Role Semantics，G．ハーマン），思考の言語理論（N．チョムスキー，J.フォーダー），後者に属するものとしては，さまざまな種類の因果説（外在主義（H. パトナム），内在主義），進化論的淘汰説（R. ミリカン），リファレンス・マグネティズム（D. ルイス），などをあげることができる．

DM_{LW}は，クリプキが解釈するウィトゲンシュタインとともに，「意味という実体」の存在は否定しながら意味が成立することを認める［超越論的意味論］の領域に属している．

ただし，デイヴィドソンの真理条件意味論は［形而上学的意味］の領域に属する他の諸理論（外延的意味論～フレーゲ的意味論）とは異なり「意味という実体」の存在を明示的には認めていない．またデイヴィドソンはクワインの影響下で意味の不確定性に関わる数多くの議論（「翻訳の不確定性」「指示の不可測性」「内容と概念枠組の分離不可能性」「言語は存在しない」）などを提出しておりそこにDM_{LW}との明白な親縁性を認めることができる．しかし私見ではデイヴィドソンの理論はそれでもなお［形而上学意味］の領域に属している。デイヴィドソンの真理条件意味論とDM_{LW}との関係を精確に探究することは，DM_{LW}の理論化を進展させるための次の重要な研究課題の一つとなる．

（3）後期ウィトゲンシュタインの意味をめぐる議論と DM_{LW} との整合性を正当化できたこと：“On Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox”（2013），”Exposition of Two Forms of Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox”（forthcoming）で，クリプキがウィトゲンシュタイン（*Philosophical Investigations*）から抽出する意味についての懐疑論的パラドックスと，ウィトゲンシュタイン自身が提示している規則をめぐるパラドックスについて，それぞれの構造と両者の複雑な関係を解明した．これによって，クリプキのウィトゲンシュタイン解釈についての新しい観点を提示するとともに，DM_{LW} が後期ウィトゲンシュタインの意味をめぐる議論と，少なくとも両立可能であることに一定の根拠を与えることができた．

（4）DM_{LW}とP. ホーウィッチの意味の使用理論との関係の解明：「意味のデフレーショニムズについて－ホーウィッチの意味の使用理論は意味論的懐疑を解決したのか」（草稿）では，意味についての理論としてDM_{LW}と最も近接していると思われるホーウィッチの使用理論とDM_{LW}との関係を詳細に探究した．DM_{LW}とホーウィッチの使用理論との外見上の類似性は，後者において〈DM_{LW}の基底-1〉における［帰結1（意味の成立条件）］［帰結3（全面的懐疑の否定）］［帰結4（私的言語批判）］が容認されている点に存している．しかし，ホーウィッチは，〈DM_{LW}の基底-1〉の「テーゼ」を否定する．したがってこの二つの理論は見かけとは異なって真っ向から対立することになるのである．しかし、その相違をふまえることで，ホーウィッチの使用理論から意味についての有益な理論的洞察を数多く得ることができた．

（5）意味という実体の存在と独我論の関係について新たな展望を獲得したこと：“Fomulation of Grammar of Sensations”（2013）によって，意味という実体の存在を否定する（〈DM_{LW}の基底-1〉の［テーゼ］）ことによってはじめて，私的言語を批判できること，したがって独我論を批判できるという展望を得た．つまり，

1* 独我論批判→私的言語批判→意味実体批判

であり，逆に言えば，

2* 意味実体の存在を肯定→私的言語は可能である→独我論の妥当である

となる．研究成果（2）で述べたようにほとんどすべての意味の理論は，意味実体の存在を肯定する．すると，もしこの見解が妥当であるとすればそれらの論者は独我論の妥当性を容認していることになるがすくなくともウィトゲンシュタイン研究者で独我論を肯定する者は皆無である．したがって彼らの見解は根本的な不整合を孕んでいることになる．このようにこの新たな展望は存在論にとってもきわめて重要な意義をもつ．現在，この論点について論文を執筆中である（「独我論は論駁されたのか－意味の実在論と反実在論の対立の帰趨－」（仮題））

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①Ken Shigeta, “The Formulation of the Grammar of Sensations,” *Mind, Language and Action*, Papers of the 36th International Wittgenstein Symposium, 査読有, vol. XXI, 2013, pp. 378-381.

②Ken Shigeta, “On Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox,” *Ethic-Society-Politics*, Papers of the 35th International Wittgenstein Symposium, 査読有, vol. XX, 2012, pp. 309-312.

〔学会発表〕（計４件）

① Ken Shigeta, “The Formulation of the Grammar of Sensations,” 36th International Wittgenstein Symposium, 16th Aug, 2013, Kirchberg am Wechsel.

② Ken Shigeta, “On Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox,” 10th Aug, 2012, 35th International Wittgenstein Symposium, Kirchberg am Wechsel

③重田謙，「因果と自由――『哲学探究』における意味論の観点から」，バイオサイエンスの時代における人間の未来 第 20 回セミナー，2011 年 9 月 28 日，大阪大学豊中キャンパス．

④重田謙，「意味についての懐疑とその解決」，第 5 回哲学ワークショップ，2011 年 8 月 2 日，大阪大学豊中キャンパス．

〔図書〕（計１件）
①檜垣達哉（編著），加藤尚武，重田謙　他，大阪大学出版会，『生命と倫理の原理論――バイオサイエンス時代における人間の未来――』，2012，総頁 221 頁，129～164 頁（「第四章　生命倫理の原理論」第二節「因果と自由について」）．

〔その他〕
HP: http://shigelabo.hotcom-web.com/wordpress/

６．研究組織
(1)研究代表者
重田　謙（SHIGETA，Ken）
長岡技術科学大学・工学部・特任准教授
研究者番号：30452402